

◆障害学生の修学支援・II◆

第二一回 車椅子利用学生の声

筑波技術大学教授

石田久之

この連載では、いろいろな角度から障害学生支援というものを考えているつもりですが、今回は支援を受けている側が、どんな気持ちでいるのか、ということにインタビューにより、聞いてみたいと思います。同志社大学大学院総合政策科学研究科前期課程二年の館林千賀子さんにかがいました。館林さんは、日常的に車椅子を利用し、いつも介助犬アトムと一緒にです。

わがまま

石田..車椅子利用学生への対応は、スロープなどのいわゆるハード面の整備が大きいと思うけれど、キャンパスの中で、一番困るのは、やはり、施設の面？

館林..はい。私の場合、ハンデを負っているというのは、やはり移動という面ですので、施設の整備が十分されていないと困ることがでできます。でも、他方で、施設の整備が終わるといことは、他の学生さんと同じスタートに立

てたということになり、そこから先、それ以上にいろいろお願いするのは、自分のわがままじゃないか、本当にできないのかと、考える場合もあります。

石田..例えば、どんなこと？

館林..やはり、移動に関係しますが、掲示板でのお知らせや連絡事項を、そこまで行っって見ることが難しいなど、フットワークよくできないことがあります。そんな時、事務の方から必要事項について連絡していただくと、とても助かります。また、準備に時間がかかるので、窓口でささと簡単に手続きができるわけではありません。ですから、前もって教えていただけると、漏れがなく手続きができます。そういった面での、事務の方の支えというのを大変ありがたく感じています。

周りの学生

石田..事務の方以外ではどうですか？

館林..整備が終わるといっても、完璧というのはあるのでしょうか。車椅子にも、いろいろなレベルがありますし、どこまで重度の方に照準を合わせるかということも問題になってくるので、最終的には人の手が必要になると思うんです。その時、教職員の方だけではなく、近くにいる学生さんの力というのでも凄く大きいんです。ドア一つと

つても私には開けられないので、近くを通りかかった学生さんに声をかけて、開けてもらうんですが、そういう時に、周りで手助けしてくれる人がいるか、いないかというのが、活動しやすいかどうかの分かれ目だと思います。

石田..どうしたら周りもそういう意識を持つのでしょうか？

館林..そうですね。他大学のことを人づてに聞いた話ですが、エレベーターを、一般の学生があまりにも使うので、車椅子利用の学生が実際に乗りたいくても使えないと。

石田..それはよく聞かぬ。

館林..張り紙があるそうです。「車椅子の方を見たら譲りましょう」と。やはり、啓発が重要ではないでしょうか。

喫茶店

石田..友達と、ちょっと話そうとか、時間が空いている時に、キャンパスの中の売店とか喫茶室に行く場合も勿論あると思うけれど、店員さんは、もう館林さんへの接し方に慣れてるって感じ？

館林..そうですね。大学側から、こういう学生がいますよと連絡があったようで、私のことを知っていてくださっているようです。自然に接してもらっています。私にとつては、今、大学の中が、一番動きやすい環境になっています。



柔軟さ

館林..また、帰る時に車椅子を車に積み込むお手伝いをお願いしていますが、事務の業務外の時間、休憩の時間などに重なってしまう場合でも、可能な範囲で、柔軟に対応してくださるので、とてもありがたく思っています。

石田..五時だから終わりって言われちゃうと、困っちゃうよね。「気持ち」という面も重要ということかな。

館林..事務の方以外にも二四時間守衛さんがいらつしゃるので、その方々にも、お世話になっていきます。本当に助かっています。やはり、友達の善意に甘え時間を合わせるのも、お互いに大変になつてきますから。ですから、なるべくなら、学校に常にいるような方、その場にいらつしゃる方、手を貸していただけると、多少、気が楽になります。

それから、授業を登録すると、担当の先生方に、こういう学生が受けますと連絡がいくようで、プリントの配布時に気を使つてくださったり、人数の少ない場合は直接渡していただくということもあります。また、テストを受ける時に、鉛筆での筆記ができず、ボールペンでしか書けないので、ボールペン筆記を認めていただいています。気持ちという面を含め、いろいろなところで支えられています。